

## 幹事会企画セッション 社会民主主義の再検討

司会：長尾伸一（名古屋大学）

報告：住沢博紀（日本女子大学）

討論者：田中拓道（一橋大学）

本セッションでは社会民主主義の現状、思想、歴史を考察することによって、その歴史的意義や現代のあり方を再検討することを目的とした。今回はほとんどの国で社会民主主義政党が野党となった西欧諸国の現状を踏まえ、現在の社会民主主義が直面している困難と、今後の展望を考えた。まず住沢博紀会員が、「ヨーロッパ社会民主主義：100年目の再度の岐路」と題し、ドイツ社会民主党を中心に、環境政策を政策の中心に取り入れた80年代末のベルリン綱領、左派路線への転換をはかった数年前のハンブルク綱領などの最近の歩みを回顧しつつ、世界的な経済危機の中で新しい役割を模索する社会民主主義の姿を概観した。報告の概要は以下のとおりである。

2010年の現在、ヨーロッパ社会民主主義は危機の時代を迎えている。10年前の世紀の転換期には、ブレア労働党の「第3の道」、シュレーダー社民党の「新中道」など、社会民主主義はEU諸国の多くで政権の座にあった。10年後の現在、社民党は野党になり、スペインなど政権にある国でも危機に直面している。おそらく現在の危機は、約1世紀前、1910年代、20年代に匹敵する。当時は、戦争と世界恐慌、それに社会主義運動の分裂と政権参加などにより、19世紀末から20世紀初頭にかけて、順調に勢力を拡大し、国際主義の理念を掲げてきた社会民主主義は、大きな岐路に立たされた。2010年、戦争への不安こそなくなったものの、グローバル化と金融危機による、政治・経済的な不安定化に直面し、さらにロシア革命・冷戦時代とは異なる形態での左翼陣営の分裂が進行している。産業労働者や公共サービス雇用者に依拠してきた社会民主主義政党は、党員数においては保守政党に凌駕され（ドイツ、イギリス）、新たな下層・貧困層からも見放され、25～35%台の政党になりつつある。基本価値、政策においても、自由・公正・連帯と並び、エコロジーの「持続可能性」を含めた、グリーンニューディールが問われている。それはもちろん社会民主主義の独占物ではない。

以上のようなグローバル化と環境意識の高揚の中で、危機にある社会民主主義は新しい時代への対応を模索している。ドイツ社民党副党首のAndrea Nahles と、労働党の有力議員 Jon Cruddasの提唱した、「良き社会 –民主左派のプロジェクト」をめぐる欧州レベルの議論(2009年末～)、およびドイツ社民党主流派の「ベルリン共和国」誌の議論などが、その新しい方向性を探る試みの例とみることができる。

現代の社会民主主義の危機は、それが中心的理念に掲げ、かつて進歩的な役割を果たしてきた「社会」的な価値が、福祉国家擁護論が現在おかれている政治的文脈からもわかるように、むしろ保守的、防衛的に映らざるを得ないところにある。これに対して広く浸透してきた「環境保護」という「グリーン」の価値意識は、社会民主党も提唱してきているとはいえ、それにアイデンティティを与えるものとはいえない。さらには「社会」に対して「グリーン」の価値意識が時として有権者の中で上位を占めるドイツなどの状況は、社会民主主義が現代を主導する勢力として復活することの困難さを示している。百年前と異なり、現在の危機をヨーロッパ社会民主主義が克服できるかどうかは確実ではない。どちらにしてもソーシャルとデモクラシーの結びつきは大きく変容するだろうし、一国的な解決はあり得ないだろう。

以上の報告を受けて、討論者の田中拓道会員から、以下のような点が指摘された。

(1) 各国の社会民主主義の発展の経路依存性を考慮すべきではないか。たとえばスウェーデンやフランスで、ドイツと同じように環境政党が大幅に伸張したり、社民党の綱領の中核にエコロジーが掲げられているわけではない。

(2) 旧来の社民主義との関係はそれほど簡単に考えられないのではないか。エコロジーは80年代に「新しい社会運動」と結びついて既存の政治に大きなインパクトを与えたが、グローバル化と経済競争の激化、先進国の格差拡大などにもなって、再配分や社会的公正、社会的包摂という問題が再浮上しているのではないか。

(3) エコロジーと産業主義との関係をどう見るべきか。近年の環境をめぐる国際政治をみれば、エコロジーとは産業主義に対するオルタナティブというよりも、新しい成長産業を生み出すという経済的要請によって主張されているのではないか。

以上の問題提起を受けて参加者の質問があり、報告者、討論者と参加者の間で、一時間弱程度にわたって議論が行われた。とくに現代の「エコロジー」をどう捉えるべきかが大き

な問題となった。現在の「グリーン」な価値意識と政策は、かつての「環境と成長の調和」論ではなく、環境保護を通じての成長へと変化し、環境保護政党もそのような立場に立っていることなどが議論された。また地球環境問題の知識が普遍化した現代では、「エコロジー」的な価値観は「社会」的な価値と違い、個人を直接世界に結びつける感覚を与えるという指摘も行われた。

これらの議論を通じて、「社会的なもの」の現在のあり方を考えるために、「グリーン」なものとの今後の関係を考察する必要があることが示された。

(長尾伸一)